

○不登校の補足

特支学級や通級学級を担当した時には、子どもの課題を解決するために数多くの学習スコアや聞き取りデータを収集してきました。その目的は子どもの課題を分析し、原因を探り、解決に導くためです。特に通級学級担当の時には不登校傾向がある子供がいました。その原因を探り解決する為にデータの収集と分析が必要でした。不登校傾向の子供の中で4割ほどの子どもが行事等で活動が込み入った日に、高次脳機能訓練のスコアが落ち込むことに気づきました。同時に教室に入れなかった時の聞き取りやアンケートを精査しました。さらに不登校傾向の子供の最大公約的な仮想モデルSLを構築して集団参加シミュレーターなども活用しました。

別項目を参照

結論として、授業以外の活動が二つ以上ある時、モデルSLに近い子供はストレスを感じセロトニンが減少し、意欲や集中力を低下させている可能性があります。

○セロトニン減少の根拠

なぜセロトニン減少と判断できたか。それはその子どもたちの多くが、通院していて少量のSSRIを服用しているからです。SSRIはセロトニン減少でうつ症状になるのを防ぐため、セロトニンが減少しにくくする薬です。セロトニン減少の症状がある、と専門医師が判断してSSRIを投薬しているのです。小学校高学年までSSRI投薬がないことから、小学校高学年からストレス反応によりセロトニン減少の症状が出ていると推察されます。

家庭状況でなく、学校のストレスによりセロトニンが減少した可能性があります。

これは私が開設しているストレス相談サイトでも、不登校の方に対してセロトニン減少に有効なセルフ経穴やセルフマッサージが効いていることからそう考えられます。

行事など活動が複数あり集団で行う活動が混んでくるとモデルSLはどうなるでしょうか。人との関わりが苦手なSLにとって人との複雑なかかわりが増えてきます。行事などで変更が起こり見通しを持つ活動が難しくなります。ゆっくりした休憩が計画的にとれなくなりリズムが崩れてきます。自分の許容範囲を超えた活動が要求されることが出てきます。それらの事柄が重なり、SLのストレスが過重となりセロトニンが減少することが考えられます。

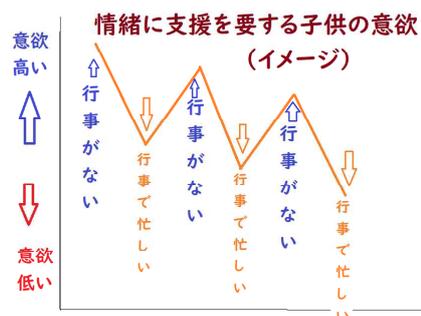
これについては別項目 を参照してください。

多様な活動が増加することは個人の状況ではありません。

集団の状況も変化する可能性があります。

人にはオキシトシン、ドーパミン、テストセロンのホルモンがあり、行

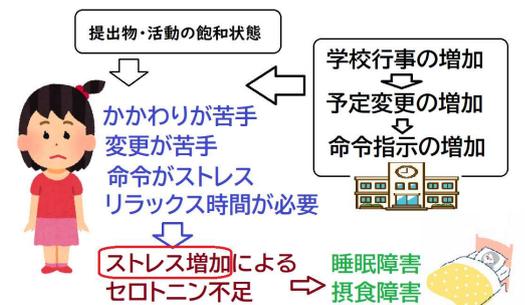
毎時間収集したアンケートと
高次脳機能トレーニングのデータ



モデルSLの学校での**ストレス**

- 人との関わりが過剰になる
- 変更が増え、自分の見通しが崩れる
- 先生や生徒からの指示が増える
- リラックスのリズムが崩れる
- 提出物や活動が飽和状態になる

自分のペースで生活できない
行事が立て込むと断続的に起こる・・・



動が調整されます。

このホルモン機能や仮想モデルSLや他の子どもたちのデータを加えて仮想社会でシミュレーションしました。

これは集団のシミュレーション結果です。

多様な活動を多く行えば、活動についてこれず活動に消極的になる個人が増えてきます。これはモデルSLに近い子供も含まれるでしょう。そしてオキシトシン、セロトニンのホルモン機能を考えると活動に消極的な子どもへの冷遇や攻撃も増えていく、というシミュレーション結果が出ています。

義務教育学校の学級のように一つの集団で多様で多くの活動を盛り込めば、結果、個人が冷遇や攻撃を受ける、このような可能性があります。

これは不登校にもいじめにも言える可能性があります。

今まで学校や学級では不登校のない、いじめのない集団作りとして、多様な活動を数多盛り込んできました。多様で多くの活動をすれば、不登校やいじめの予防になると信じたからです。しかしこれは逆効果になってきた可能性があります。

対策として数多の活動を増やしている学級学校がほとんどです。ですが、不登校は増加し続けています。対策をすればするほど不登校は増加している結果にさえ見えるかもしれません。今一度、不登校の原因と対策を考えてみましょう。

○改善策

不登校傾向に至る原因は一つではないと思います。原因らしきものが現れても、それが一つですべてを特定できる結果にはなっていない、と考えます。

ですが、集団としての改善が学校で可能なものと思われま

す。その改善方法は以下となります。

1 全員が参加する集団活動を授業活動中心に行い、その他の活動を大幅に削減する。

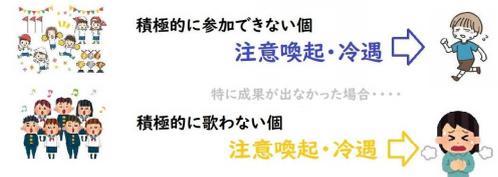
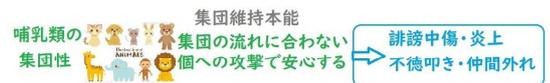
この解決法は難しい事ではありません。義務教育学校であれば最大の目的は「全員の子どもに授業活動で教育を授ける」事です。その目的に集中するという事です。

2 授業活動以外で集団活動を行う時には、その活動への参加は個人の選択制とする。

提出物も選択制とする。その子供達には様々な個性があります。提示したモデルSLに近い子どもも存在します。現在の学校ように集団活動が増加した状態に耐えられない子どもも存在する可能性があります。実際には中3で学習塾に通う子供は全体で8割になります。もうすでに個人が活動の負荷を選択する環境になっています。

3 集団活動をおこなう時には個性を重視した計画と役割分担を行った上で活動する

様々な子供に集団活動をさせるためには、個に応じた配慮が必要です。集団活動を行う際にはその配慮が不可欠であり、充分に行う必要があります。

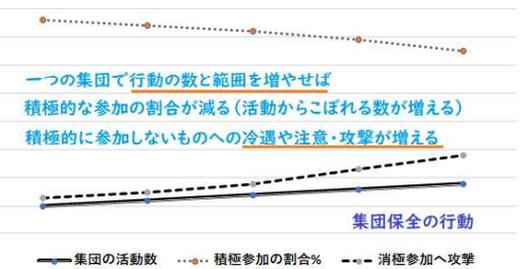


生体ホルモンによる集団保全機能



脳科学者・中野信子先生の著書「人はいじめをやめられない」から引用

集団行動シミュレーター



それは別項目の「0論文番号43行事参加へ各個への支援」にあるような個性を十分把握したうえで支援を行い集団活動を行う必要があります。

END